HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パネルディスカッション: 遠くて近きは-人と動物の”ほどよい”距離感-
Author(s)	池田, 貴子; 池田, 透; 出島, 誠一 他
Citation	科学技術コミュニケーション, 23, 67-78
Issue Date	2018-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71125
Type	other
File Information	08_panel_67-78.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

小特集ノート：寄稿

パネルディスカッション
遠くて近きは～人と動物の“ほどよい”距離感～

池田 貴子[1]，池田 透[2]，出島 誠一[3]，大西 純子[4]

Panel Discussion: Far and Near
A Sense of “Suitable” Distance between Human and Animals

IKEDA Takako[1], IKEDA Tohru[2], DEJIMA Seiichi[3], ONISHI Junko[4]

キーワード：野生動物，ペット，人，距離感，共生

Keywords: wildlife, companion animal, human, a sense of distance, symbiosis

1. アニマルライツとアニマルウェルフェア

池田（貴）：　シンポジウム開催に先立ち，事前に Web サイトからご登録いただいた質問の中からご紹介したいと思います．最初に，もりじゅんこさんから，

「よく息子と動物園に行きます．私たちは様々な動物の生態系について楽しみながら学べますが，動物園の動物は幸せだと思いますか？」

というご質問です．先ほど池田透さんがおっしゃったアニマルライツやアニマルウェルフェア（後に詳述）の問題に関係しそうなので，最初に池田透さん，お願いできますか．

池田（透）：　非常に難しい問題ですよね．動物が幸せかどうかを判断するのは，非常に難しいです．本当は彼らに訊いてみないと分からないですが，飼い方によりけりなのかなと思います．野生に近い状態で生活している動物にはそれほど負担でもないでしょうし，人間の存在があまり負担にならない動物もいれば，非常にストレスになってしまう動物もいるので，それは種によっても違うだろうと思います．

長崎バイオパークというところで，こちらのアライグマのワナ（図１）を使って実験させてもらっているのですが，なぜ，わざわざそんな遠くまで行くのかというと，たいていの動物園ではアライグマは１～２頭だけで飼われていて，そのような個体は本来の社会性が奪われてしまっていて実験にならないのです．ワナに対しても，一瞥するだけでまったく反応しません．一方，長崎バイオパークでは，なんとアライグマを 40 頭も飼っています．それを 20 頭ずつのケージの中に入れ，自由に遊ばせながら複数飼育しているので，非常に健全な社

2018年6月7日受納　2018年6月22日受理
所　属：1. 北海道大学 科学技術コミュニケーション教育研究部門（CoSTEP）
2. 北海道大学大学院 文学研究科 人間システム科学専攻 地域システム科学講座
3. 公益財団法人 日本自然保護協会
4. 特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン ピースワンコ・ジャパン プロジェクト
連絡先：ikeda@costep.hucc.hokudai.ac.jp

会性が保たれているのです．彼らを見ていると「元気に生活しているんだな」と思います．１～２頭だけで社会性を失った状態で生活しているアライグマは，やはり辛いのではないでしょうか．



図１　会場に展示された巣箱型ワナ（手前）と箱ワナ（中）

　動物園が一概に悪いというわけではありません．動物園の役割は四つあると考えられています．一つは，もちろん子どもたちのレクリエーションの場としての役割，二つ目は社会教育の場，三つ目は自然保護の場，そして四つ目は調査研究の場としての役割です．自然保護の場としての役割というのは，動物園では，野生環境ではすでに絶滅してしまって動物園でしか見られない種も飼育されているのですが，彼らは単なる見世物ではなくて，将来もし環境が回復したら野生に戻すこともできるかもしれないからそのために動物園で飼い繋いでおく，あるいは遺伝子を保存しておく，という意味です．絶滅したら，もう２度と同じ生物は生まれてきませんから．こういった動物園の意味についても，改めて考えていただければ良いのかもしれません．

池田（貴）：　では，もう一つ，
「サーカス，競馬，ペットなどは必要悪？動物の権利と両立できるのでしょうか？」
というご質問です．

池田（透）：　スライドにも出ていますが，アニマルライツ（animal rights：動物の権利）という言葉は動物愛護の文脈で使われます．動物愛護にも立場がいくつかあります．よく最近言われるのは，どちらかというとアニマルウェルフェア（animal welfare：動物の福祉）のほうです．アニマルウェルフェアの考え方では，人間が動物を利用することを許容します．一方，アニマルライツとは，例えば実験動物のように動物を人間のために活用することを一切否定する立場です．両方に共通するのは，動物に苦痛を与えてはいけないとする点です．ピーター・シンガー（Peter Singer）[1] というオーストラリアの哲学者によって提唱された考え方が元になっていますが，実は彼は，厳密には「rights 権利」という言葉を使っていませんでした．彼が唱えたのは動物の開放論みたいなもので，「動物のなかにも，人間と同じように悲しみとか喜びといった感情を持つと思われるものがいる．そういう動物に対して不当な扱いをするのは，差別にあたるのではないか．それをやってはいけないのではないか．」という主張です．ピーター・シンガー自身は，人間が動物を利用することは否定していません．あくまで，動物が「苦痛を感じるかどうか」が非常に重要なポイントになるわけです．

　そういう意味で言うと，例えばサーカス，競馬，ペットについても考えようだと思います．競馬は鞭を打って走らせていますが，それが苦痛かどうかは難しいところですね．馬自身は走ることは決して嫌いではない．サーカスも，芸を強要しているように見えても，例えば調教師とその動物の関係の中には特殊な関係を見出すことができるかもしれない．ケース・バイ・ケースではないでしょうか．ペットは，我々，人間の生活を豊かにしてくれていること

は間違いありませんが，「うちのワンちゃん，ネコちゃんは，幸せかどうか」というのは，おそらくご自分で飼っていらっしゃる方でも判断が難しいと思います．

私もイヌを飼っています．家内と一度，去勢するかどうかで意見が食い違いまして，喧嘩をしました．ペットのイヌやネコは，だいたい去勢しますよね．去勢したほうが長生きするからです．ということで結局，我が家のイヌも去勢したのですが，でもよく考えてみてください．去勢するということは，生き物の繁殖能力を奪うということです．生き物にとって一番重要な繁殖能力を奪う権利は，それこそ人間にあるのでしょうか．でも確かに，去勢によってペットは長生きします．その辺は，飼い主の考え方一つかもしれません．そういう非常に難しい問題を孕んでいるのだということを考えながらペットに対していただくしかないかと私は思いますが，いかがでしょうか．



図２　ディスカッションするパネラー．左から池田（透）氏，出島氏，大西氏，池田（貴）氏

池田（貴）：　そうですね，予防医学的な観点からも，単に長生きするだけでなくQOL（quality of life）[2] を保った状態で長生きできるという意味でも，去勢とか避妊手術を選択される飼い主もいらっしゃると思うのですが，そのあたりを大西さんは，どうお考えですか．

大西：　ペットにとって何が幸せで，何がそうではないのかについては，私たち人間側で判断するしかない部分はあるのですが，先ほども働くイヌのお話をしましたが，何をもって彼らの興味をそそり，何をもってやる気を起こさせるのか，「これがやりたい」「あれがやりたい」という欲求を私たちがどう満たしてあげるかということが，動物と暮らすうえでとても重要ではないかと思います．

イヌの一番強い欲求は，臭いを嗅ぐということです．私たち人間と違って，彼らの世界は嗅覚が９割を占めていると言っても過言ではないぐらい，情報収集のほとんどが鼻によって行なわれているのです．私たち人間は視覚によって情報を得ることがほとんどです．ですが，イヌの目は遠視だったり，あるいは青と黄色の２源色だったりと，目から得る情報量は私たち人間と比べて少ないのです．でも嗅覚は，人間の１億倍も敏感だと言われていて，しかも分子レベルで臭いの区別ができるそうです．私たちがSNSでいろんな情報を得るのと同じように，散歩の途中で彼らはクンクン臭いを嗅ぎながら「あそこの何々ちゃんが，ここにやってきたんだ」とか「今日の公園は何頭ぐらいが来たかな」とか，本当に様々な情報を得ているのです．

そういった情報を得ることで，彼らは社会と繋がっていると感じたり縄張りを確認することができ，満足感を得られるのだと思います．そういう欲を満たしてもらえることで，人との生活も「まぁ，良いか」と（笑）．朝，昼，晩の３食はついているし，温かいところで眠れるし，臭いもおもいきり嗅がせてもらえる，よく外で遊ばせてもらえるといった欲を満たすことによって，イヌは満足するのではないか．それを知らずに接してしまうと，イヌたちは

もしかすると人間と暮らすことが窮屈と感じるのではないかと思うのです．だから，その動物が何を求めているかを理解して環境を整えてあげることが，例えば動物園でもサーカスでも，大切だと思います．

池田(貴)：　なるほど．今はイヌの話をしていただきましたけれど，その動物の種類によって何が幸せと感じるかは違うだろうし，残念ながら私たちは動物の言葉が分からないので直接彼らに訊くことはできないけれども，何となく様子で「痛くはなさそうだな」とか，そういう判断をするしかないところもあるということでしょうかね．私も家にネコが2匹おりますので，とても良く分かります．

2. 人工的に野生を復活？

池田(貴)：　先ほどの質問と近いのですが，

「保護下でしか生息を確認できない動物を保護する意味はどこにあるのでしょうか？」

という質問です．動物園ですとか，あとは佐渡で日本産のトキが個体群絶滅したため，中国産のトキを導入しましたよね．ああいった野生の力だけでは個体数を回復できない動物を保護し，人工的に個体数を元に戻す行為にはどういう意味があるのかということがこの質問の意図だと思います．出島さんがたぶん近い分野だと思いますので，お願いします．

出島：　先ほど，動物園の機能の話がありましたけれども，野生状態としては絶滅してしまった動物を再び野生に戻していく取り組みは，トキやコウノトリといった動物で日本でも始まっています．このような活動を「再導入」といいます．彼らが野生絶滅したのには，生息地が無くなったという理由がありますので，生息地を回復・復元することなく単にどんどん野生に放せば，あたかも殺してしまうのと同じという結果を生みます．従って，生息地そのものを復元する活動が必要です．その際，生息地の復元だけでなく地域おこしをセットにした戦略が多いと感じています．例えば，トキやコウノトリの生息地で無農薬のお米を作って，付加価値をつけて売り出したりしています．

いま私が取り組んでいるイヌワシも，野生では個体数が減少しています．一方で，動物園など飼育下で繁殖をさせる技術はここ数年でかなり確立され，動物園ではすでに大幅に数が増えたために繁殖制限するような状況にまで至っています．それを，野生下で個体数が減ってしまっている地域に再導入できないかという議論は確かにあるのですが，それよりまずはちゃんと生息地を回復することが大事だと考えています．例えば我々が赤谷の森でやっているような，イヌワシが狩りをしやすいような環境を作っていくこともそうした活動の一環なのですが，生息地を整備した上で，日本の環境では絶滅してしまった生き物，もしくは絶滅の危機にある生き物を野生に戻していくことには価値があると思いますし，それは今後，いろいろな形で我々が取り組むべきだと考えています．

池田(貴)：　ありがとうございます．それと関連して，北海道の方だったらエゾオオカミの再導入の話を聞いたことがあるかもしれません．北海道で絶滅したエゾオオカミの代わりに，遺伝的に近いタイリクオオカミを連れてきて北海道に再導入したらどうかという議論もありますが，池田透さんはどう思いますか．

池田(透)：　オオカミも昔日本にいた動物ということで，もう一度，再導入したいという意見があるのは皆さんご存知だと思います．ノスタルジーとしては分かるのですけれども，現実的にそれが可能かどうかということも，まず考えないといけません．一つは，ちょうど出島さんがおっしゃられた，現在オオカミが戻って来て生存できる環境が整っているのか，ということです．オオカミが生きていくためには，非常に広い面積が必要になります．ある研究の試算では，北米のオオカミのパック（群れ）は，だいたい 13〜14 頭で構成されていて，それで一家族です．北海道で再導入の候補地になっている知床半島の面積では，１パックすら養えないのです．そんな土地に再導入を実行することに無理はないのでしょうか．

それから，農業被害も覚悟しないといけません．通常，オオカミは人は襲わないといいます．アラスカでこんなことがありました．クマがその辺にいくらでもいる地域だったので，狩猟局の人に「私はここでテントを張る．クマに襲われた場合どうしたら良いか」と訊いたら，「ここへ逃げろ」と地図を指して言うのです．「ここに何があるんだ」と訊くと，「オオカミの巣だ．お前がオオカミの巣に逃げ込めば，彼らがクマを追っ払ってくれる．オオカミは人間には危害を加えないよ」と（笑）．でも，間違いなく家畜は襲うのです．それをガードできるかということですね．

アメリカのイエローストーン国立公園では，20 世紀初頭にオオカミが絶滅したため，1995 年にカナダからオオカミを再導入しました．彼らが公園の外へ出て問題を起こさないために，どれだけ多くの人間が，どれだけ大きな労力をかけているか．日本で同じことが可能かどうか．残念ながら，今はその時期ではないと思います．条件が整っているかどうかをきちんと考えて対応することが必要です．

3. 命と向き合いながらの対策

池田(貴)：　一度絶滅した動物を他のところから連れてきて再導入するのは，外来種の定着とも近い構造だと思うのですが，ペンネーム，シゲじぃさんから，

「外来種はだめなんでしょうか？」

という質問がきています．例えば，「アメリカザリガニだって，ニホンザリガニと同じザリガニじゃないか」という意図だと思うのですが．外来種に対処しなければならない理由をもう少し具体的に教えてください．

池田(透)：　「外来種はいても良いのではないか」という，養護派の人たちもいるのです．「生態系の中でそれなりの役割をはたしてくれる」と主張されます．動物が何かの役割をはたすのは当たり前で，良いにせよ悪いにせよ，生態系の中でいろいろな機能を背負う形になります．でも，それが同じ種の再導入の場合ですら，かつてとまったく同じではない．しかも，種が同じとはいえ遺伝的組成の異



なるものを入れるわけで，それがどういう事態を引き起こすかは，はっきり言って予測は難しいです．

先ほど，進化的重要単位[3]のお話をチラリとしました．長い時間をかけて独自の進化の歴史を背負った生物集団のことを，進化的重要単位といいます．個体同士の遺伝子の交換や，その時々の環境に合った遺伝子が次の世代に伝わるといった過程を経て，現存の生き物はこの世に存在しているわけです．その構造を，外から連れてきた外来種は一瞬にして変えてしまうのです．できればそれは未然に防ぎたいと私は考えています．

外来種対策は，決して「外来種憎し」でやっているわけではないのです．あくまでも在来の生態系や在来の生物多様性，これを守るというのが第一の目的ですから．いままで我々が先代から受け継いできた日本の，あるいは北海道の豊かな自然を次の世代にそのまま受け渡すという責務を，我々は背負っているのではないかと思うのです．自分たちの都合の良いように変えたものを，次の世代に負債と一緒に受け渡すのは避けたいところです．今までの進化の歴史を断ち切らない形で，自然を次の世代へ受け渡す，これが我々の役目かなと思います．そういう意味で，外来種は残念ながらいてはいけない存在と考えるべきではないかと．

池田（貴）：　外来種によってもたらされる影響を予測するのは非常に難しいために，負債を後世に押し付けることになりかねない怖さがあるということですね．

次に，これは外来種に限らずなのですが，

「生き物を手にかけなければいけない現場の辛さをどうケアするのか」

というご質問です．もちろん外来種対策でもそうですし，在来種であっても個体群の適正維持のための間引きや，ペットの殺処分に携わる職員の方にも当てはまる問題ですね．かなりストレスフルな仕事だと思うのですが，どういうふうにケアしたら良いのかというご質問です．これはお三方全員にお訊きしたいと思います．

大西：　私は現場に一番近いといいますか，毎週のように職員の方に会って，そういうお話をずっとさせていただいておりました．広島県の場合，2016 年度から私たちがイヌの引き取りをさせていただいているので，先ほどのセンターのガス室での殺処分がなくなったわけです．担当の獣医師さんがよくお話しされるのが，「いままでしたくてしたいわけじゃないし，動物の命を救いたい，治療してあげたい，研究がしたいと思って獣医師になった．だけど，行政獣医という仕事の中には動物を処分しなければならない，あるいは亡くなった個体の確認をしなければならないという辛い仕事があり，これをずっとやってきて，行き場のない気持ちがあった．今，処分をすることがなくなって，正直，気持ちが軽くなった」と．私自身も，その職員の方に会うたびに顔色が全然違うなと感じていました．以前は，どうせ処分してしまうイヌたちネコたちだから，何か手をかけてあげても 1 週間後にはいないから何もしないという状況だったのが，今は，1 週間後にピースワンコが迎えに来るから，と少しでも人に慣れるように手からおやつをあげたり，怪我の手当をしてあげるというように，「生きるための仕事ができるようになった」とおっしゃってくださいました．「（引き取りの活動を）やって良かった」と，思いました．

ただ，何が何でも殺処分がいけないと言っているわけではありません．いたしかたない処分というのはあるのです．収容されるイヌたちの中には，交通事故で瀕死の状態で運び込まれたり，高齢で腫瘍がいくつもあって生きているのが辛いだろうな，というイヌたちもいるわけです．そういったイヌたちにとって，そのまま命が尽きるまでそこにいるのが良いかと

いうと，そうではなくて，アニマルウェルフェアの考えにもあるように痛み・苦しみから解放してあげなければならない．そこは責任を持って，注射による安楽死で送ってあげるという選択肢も必要だと思っています．

池田（貴）：　ありがとうございます．今はペットのお話をしていただいたのですが，では，野生動物の場合はどうでしょう．

出島：　職員の精神面のケアについては本当に難しいと思います．ケアは必要だと思いますし，たぶんパーソナリティーの部分が大きいので，目の前の殺処分ではなく，その先にある社会的意義のほうに気持ちを向けることができて，目の前の辛さに耐えられるようになっていただくのが良いのでしょうけど．私も，神奈川県三浦半島でアライグマの対策を地域の方々と共にボランティアでやっていたことがあったのですが，地元の獣医さんにアライグマの安楽死をお願いすると，獣医さんから「こういうことをやっていると絶対に言わないでください」と言われたことがありました．「それはそうかな」と思いました．



あと，森林管理においてニホンジカが問題になっていると言いましたけれども，企業で社有林を持っているところがたくさんあるのですが，そういう社有林の管理について私なども議論したりアドバイスすることがあります．やはり「ニホンジカを捕っているけれど，捕っていますと言えないんですよね」とおっしゃる企業はあります．特に食品メーカーだと，言いたくないけれど積極的にやっていかないといけない．そういう中で「日本自然保護協会が捕っているというような話があると，少し言いやすくなるかな」と言われたことがありました．結果的に赤谷の森のシカは低密度なので，我々は捕ってはいないのですが，「捕り始める」ということを記者発表して，私たちは発信しました．社会的意義，つまり「いま対策することが大事なのだ」と発信することが大事だと思ったのです．話がズレるかもしれませんけれども，意義がありさえすれば現場の辛さが乗り越えられるわけではない点が辛いところだと思うので，そこは最大限のケアが必要だろうと思っています．

池田（貴）：　そうですね．…池田透さん，聞きにくいことを伺いますが，アライグマの駆除にふみきる際，どういうふうに折り合いをつけられましたか．

池田（透）：　私は結構図太いので，あまり（笑）．やはり責任感といいますか，最初に対策を始める立場の人間ですので，その辺は大丈夫でした．ただ，当初はアライグマの研究を始めるかどうか，相当悩みました．バッシングも覚悟したうえで悩んだあげく，最後は尻をまくりました．最初のころはまったく孤立無援でした．今でこそ外来種問題についてこうして普通に聴いていただける状況になりましたが，当初は全部が敵みたいな状態でしたし，「駆除するべき

は，お前のほうだ」と言われました（笑）.

池田(貴)：　それは，ひどいですね.

池田(透)：　ええ（笑）．ですが，状況はこのように変わってきました．が，やはり殺処分は，やりたくてやっているわけではありません．外来種の殺処分も，本当にこれは苦渋の選択です．他に手がないからです．なかにはアライグマを殺さずに処分する方法を考えた方もいらっしゃいました．「アメリカから来たんだから，アメリカに戻そう」とか（笑）．ですがそんなお金はありませんし，実はお金だけの問題でもないのです．日本に入って来て定着したアライグマの体内には，タヌキ回虫という寄生虫がついています．タヌキ回虫はアメリカのアライグマにはいません．それを持ち込むことになってしまうので，アメリカに戻すことはできないのです．いろいろ考えても制限があるため，やはり殺処分は止むに止まれぬ苦渋の選択なわけです.

ペットの殺処分についても，携わっている人の心的負担は本当に大きい．生き物を殺したくて殺す人間は，まずいません．しかも，自分が起こした問題ではないのです．他人が起こした問題の対策を，やむをえずやってくれているのです．ですから，こういう場でこういった問題について知った皆さんには，現場の人たちの負担や，そういう思いも飲み込んだうえで対策にあたってくれているのだということを，少し理解していただきたいと思います.

池田(貴)：　アライグマ駆除について住民の方から苦情の電話が来たという話を，以前，伺ったのですが.

池田(透)：　そうですね，最初のうちは，やはり，「なぜ，こんなかわいいアライグマを殺すんだ」という電話がありました．一番長いときで７時間ものあいだ電話を受けたことがありますが，なかなか理解をしていただけない．「私たちはアライグマの移入を社会的問題として扱っています．他の動物だけでなく人間社会にも影響があるんです．人間社会に問題が起きると大変ですよね」と言うと，その方がおっしゃるには「私は人間はどうなっても良い」と．これを言われると，落としどころを見出せないですね．対象の動物のかわいさだけに着目されてしまうと，なかなか接点を見つけることができないし，解決も難しい．でも，先ほどお話したとおり，かわいいか・かわいくないかだけの問題ではないですので，なるべく皆さんには広い視点から総合的に判断していただければと思います.

池田(貴)：　その，「保護する・保護しない」「駆除する・駆除しない」の話に関わることなのですが，では次のご質問．かさだりゅうたさんから，

「人気のある動物だけ保護対象になっている気がします．例えば，人気がなくても保護されている動物がいるという事例はあるのでしょうか？」

というご質問ですけれども…出島さん，いかがですか.

出島：　おっしゃる通りのところもあって，例えば，ネコ科の動物は，我々，自然保護協会の中では寄付金が集まりやすい傾向にあります．イルカ，クジラなども同様で，社会から要請があれば，当然，保護活動は前に進みます．欧米でかなり先鋭的な保護活動が見られるのも，基本的にはバックにそういった活動に資金を提供する方がいるからこそという事実がありま

す．かわいい・かわいくないとか，人気がある動物が保護されているように見えるのは，人間社会の中でやっている活動ですから結果的にそういう状態になってしまうのはよく分かりますし，私も常に難しい問題だと思っています．

我々，日本自然保護協会では，ただイヌワシを守りたいというよりは，イヌワシが生息できるような森を守ることを目指していて，それは1万ヘクタールの森を守るということに等しいのです．ですから，アンブレラ種[4]となる動物を積極的に守ることが大事です．かつ，人気があって，寄付などの支援に対してもある程度アピール力がある動物を使いつつ，その動物を保護することによって生態系に与える効果が裾野にまで広く行き渡るように，様々な生き物にまで恩恵が渡るように，ということを常に考えています．

一方で，これも私が神奈川の地元でボランティアをやっている里山活動の中での出来事なのですが，神奈川県内ではマムシが絶滅危惧種です．里山活動を一緒にやっているおじさんたちは，マムシを見つけると「あ，マムシだ」と言ってグチャッってつぶしちゃう（笑）．「あっ！それダメなんです！」と止めることが何度もありました．マムシは絶滅危惧種だと何度も説明をしたのですが，後日，「この里山には子どもも来るからマムシがいたら危ないじゃないか」と反論されて，「そこを一緒に気を付けながら，こういうところで遊ぶというのが大事でしょう」とか，いろいろ議論をしましたが，なかなか簡単にはいかないという事実があります．人気のある動物だけ保護対象になっている気がするというのは，僕もそうなのかなと思っていますが，そういう状態ではあっても，いかに様々な生き物が守られるようにするか工夫することが必要だと思います．

池田（貴）：　どうしても人間の考えることですから，ついどこかに肩入れしてしまうことはあるのでしょうね．オーストラリアの生物研究に関して，「醜い生物のほうが研究が遅れてることがわかった」という論文（Fleming et al. 2016）[5]がありました．もしかしたら，研究者もかわいさに惹きつけられることもあるかもしれないですね．

4. 人と動物の共生

池田（貴）：　それでは，いよいよこのシンポジウムのテーマである，人と動物との共生，理想の関係についてディスカッションしたいと思います．

「人と動物の共生をめざすうえで，理想の知識レベルというのはあるのでしょうか」

加えて，

「小中学校とか高等学校のような，大学で専門教育を受ける前の段階で，人と動物がどういう関係性を保ったら棲み良い社会になるのかについて，現在，教育は成されているのでしょうか」

というご質問です．これも皆さんに一言ずついただきたいのですけれども，大西さんからお願いします．

大西：　私の世代だと，小中学校の理科や生物の教科書には，身近にいる動物のことはほとんど出て来ないですよね．私は，ドッグトレーニングについてはスイスとドイツで学ばせていただきました．スイスでティアハイム（Tierheim）[6]と呼ばれる保護施設にボランティアに行っていたときに，幼稚園にイヌを連れて行く訪問活動がありました．幼稚園に行くと，子どもたちはイヌが来たことでワーッと大騒ぎになってしまいます．でもそこでは，子どもたちが

大騒ぎすることをイヌたちがどういうふうに感じるのかを，子どもたちに実体験させるのです．これを日本の幼稚園でやると，たぶんお父さん，お母さんが飛んで来ると思うのですが，スイスでは子どもたちに耳をつけて，鼻をつけて，尻尾をつけて，飼われているイヌと同じように首輪をつけて，リードをつけて，教室にあるリードフックにかけられ，「そこに座りなさい」と先生に言われるのです．

池田（貴）：　辛いですね，それは．



大西：　はい．イヌ役の子どもが，そこへ座ります．その他，大勢の子どもたちには，「じゃあ，さっきワンちゃんが入ってきたのと同じように大騒ぎしてください」と言うと，子どもたちは「わーい！イヌだ！」と騒ぎながら，それそこ尻尾を引っ張ったり，リードをピッと引っ張ったり，上から手を出して頭を撫でてみたり，身体をガシガシと撫でてみたり，いろいろなことをし始めます．「ストップ」と声がかかって，止めた後にイヌ役の子どもに「どうだった？」と訊くのです．すると子どもは「ものすごくうるさかったし，急に後ろから尻尾を引っ張られてビックリした」と，体験したことを話します．「では，ワンちゃんに初めて会ったとき，どうしなければいけないでしょう？」と先生が問います．すると，子どもが自ら「大きな声をかけてはいけない，後ろから急に触ってはいけない，リードをギュッと引っ張ってはいけない」と，幼稚園の子どもがちゃんと話すのです．

私は幸いにして生まれたときからイヌと一緒だったので，身体でそういうことを知っていたからイヌとの接し方を知っていたけれども，今この日本の社会の中で，子どものころからイヌやネコを飼っている子どもたちは非常に少ないと思うのです．だから初めてイヌと会ったとき，どう接してよいか分からない子が多いのだと思います．

それと同じように，この地球上に生きているたくさんの生物のことを，もっと小さいときから幅広く，人間と動物たちがこの地球上にどうやって暮らしているか，食物となる動物，あるいは革製品になる動物のことなどを，何らかの形で少しずつ知っていく必要はあるのではないかと思います．ドイツのティアハイムには，家畜の写真があって，牛の画がポンと真ん中にあって，その牛はミルクを出しそれがバターになり，生クリームになり，みんなのケーキになる．皮はみんなのサッカーボールや靴になるということが書かれているのです．「そういえば，こういうことって子どものときに習わなかったな」と思ったので，私はその写真を使いながら，幼稚園や小学校に行ってお話をさせていただいています．そういうことが，まずは必要なのではないかと感じています．

池田（貴）：　自分が想像できないことは実際に体験してみよう，ということですね．

出島：　今のお話，私は知らなかったので，やはり欧米の教育はすごいなと思いました．もう一つ，日本の理科教育で，日本の野生動物とか自然についての情報が少なすぎるということは，かなり言われていますし，私自身もそう思います．NGO としても積極的にこの状況を変えられるようにしたいと思っていますし，その中でも多様性については，今，様々な教育の場面で掲げられているテーマだと思います．多様な存在を，どういうふうにみんなで折り合いをつけて受け入れていくのかは，教育の中に織り込まれつつあると思うのですけれど，非常に大事なことだと思っています．

池田（貴）：　ありがとうございます．では池田透さん，お願いします．

池田（透）：　理想の知識レベルを提示するのは難しいのですが，今の人たち，子ども，若い人たちは，ものすごく良く動物について知っています．知識を持っています．ただ，実際に接した経験がないのです．僕らの世代，研究者同士で話をしたりすると，「いやぁ，昔，無茶苦茶やったよな」と．昆虫だの魚だの，いろいろな物を捕ってきては，足をもいでみたりとか，あまり人には言えないこともたくさんやりました．その中で，やって良いこと，悪いこと，その判断をつけていったわけです．おかしなことをやると，後で気分が悪い．「あぁ，これはやってはいけないことなんだ」と気づく．「そういうことの積み重ねで，今があるんだよね」というような話は，よくします．それに比べると，今の人たちは少し頭でっかち過ぎるのかなと思います．知識はいっぱい持っているけれども，それをどういうふうに活用して良いかが分からない．どこにどういう動物がいるとかいう知識はいっぱい持っているけれども，では，それとどういうふうに付き合っていくのかという考えにまでには至っていないのが残念だなと思います．

そういう面では，小学校でもできるだけ身近な生き物で学習してほしいところなのですが，それがまた外来種のタネになってしまう（笑）．アメリカザリガニが良い例です．入手しやすく，学校で飼いやすいので飼い始めて，授業が終わったら，「皆さん，家に持って帰って飼ってみましょう」となります．持って帰ると，お母さんに「何，こんなものもらってきて！捨ててしまいなさい」と言われ，捨てると，野生に外来種が放たれることになります．残念ながら，日本ではまだ欧米のような進んだ形の教育システムはないので，そのあたりを改革していっていただければと思います．

生き物というのは，科学的な価値だけではなくて，我々の中の心象風景みたいなものを形成してくれます．私は，いろいろなところで外来種の話をするのですけれども，小難しい話をするより，最後にこういう言い方をすると，皆さん，特に年配の方が一番良く理解してくれます．「日本に『ふるさと』という歌がありますよね．『うさぎ追いし　かの山　こぶな釣りし　かの川』．これが放っておくと『アライグマ追いし　かの山　ブラックバス釣りしかの川』．こういう日本にしたいですか？」．これが一番，理解してくれるんです．

池田（貴）：　聞き手の感情に訴えるということですね．

池田（透）：　そうですね．本当は我々，研究者としては，感情ではなくて理論で訴えたいところなのですけれども，そういう面で自分の力の至らなさを感じるとともに，感情の重みというものをいつも感じます．そういう意味で，感情と知識の両面で豊かな関係性を築いていただけたらなと思います．

池田（貴）：　ありがとうございました．さて，「人と動物との共生とは」．皆さんもモヤモヤしていただけたでしょうか．私は，この３時間で，泣いたり，頭を抱え込んだり，改めていろいろなことを考えました．人間と動物との共生，この問題は，たぶん，今すぐ答えが出るものでもないですし，将来必ず解決するというものでもないと思います．こうやってみんなで時々，できたら集まって，「ああでもない，こうでもない」と言い合うことでその問題を確認し合う，その時々の最善策について語り合う，そういったことが必要なテーマなのかと思います．

それでは皆様，どうも本日はどうもありがとうございました．

注

1）ピーター・シンガー（Peter Singer）．哲学者．プリンストン大学教授．著書『動物の開放』（1988）で，動物への不当な扱いについて批判を提唱した．

2）QOL（quality of life）とは，不快に感じることを最大限に軽減し，できるだけその人がこれでいいと思えるような生活が送れるようにすることを目指した，医療の考え方．

3）進化的重要単位とは，オリバー・A・ライダー（Oliver A．Ryder）らが 1986 年に提唱した生物集団の保全単位で，生物集団の系統進化という歴史性に価値判断基準をおいた生物集団の分類概念．数十万～数百万年の長い時間をかけて，別の地域でそれぞれに独自の進化を遂げたグループを指す．こうして形成されたグループは，同種であろうと別種であろうと関係なく，進化的に重要な単位とみなされる．その分類の仕方に関しては，いまだ議論が続いている．

4）アンブレラ種とは，その地域における生態系ピラミッドの頂点に位置する消費者を指す．アンブレラ種を保護することで，広い面積の生態系（生態系ピラミッドの下位の生物を内包する）を，傘を広げるように保護できるという概念．

5）オーストラリア国内に生息する生物研究の内容や論文数について調査した論文．醜い（“ugly”）生物では，種数の多さに比して研究数が少ないことを示し，研究者が市民の関心を惹きつけにくい動物の研究を敬遠する傾向があるかもしれないことを示唆した．

6）ティアハイム（Tierheim）とは，ドイツ語で「動物の家」を意味し，飼い主のいない動物を保護・飼育する民間施設を指す．保護動物の健康管理やしつけに気を配り，里親探しを行なう．ドイツで発祥し，現在は欧米を中心に数か国に存在する．

文献

Fleming et al. 2016: “The good, the bad, and the ugly: which Australian terrestrial mammal species attract most research?”, Mammal Review 46, 241–254.